

excluding の用法の歴史的変化

— 文法化の観点から —

はやし ともあき
林 智昭

京都大学大学院

hayashi@hi.h.kyoto-u.ac.jp

1. 序論

本論では、動詞や形容詞などの品詞としての特徴を持つ周縁的前置詞とされている *excluding* (cf. Quirk et al. 1985: 667, 707) の通時的変化の過程を、Oxford English Dictionary (以下、OED) を用いて記述し、文法化の漸次変容に基づき、*excluding* の現在分詞形の位置づけを行う。そして、いわゆる動詞派生前置詞研究の一つの事例研究とすることを目的とする。

本論の構成は以下の通りである。2 節では、動詞派生前置詞、文法化理論の先行研究を概観した上で、先行研究上における位置づけ、問題点の指摘とともに、本論における分析の出発点となる論点を述べる。続く 3 節では、本論における用語の定義として、分析において関わる現在分詞の特徴を概観し、文法化の漸次変容に基づき、品詞としての分類を行い、動詞派生前置詞を規定する基準を示す。次に、4 節では、OED のデータを用いて *excluding* の記述を行い、文法化現象との関係を論じる。最後に、5 節で今後の課題と展望を述べる。

2. 先行研究

2.1 文法化とは

「文法化」という用語及び現象については、様々な定義が存在し、多種多様な研究が行われている。たとえば秋元 (2002: 4) は「開かれた語彙項目が閉じられたクラスの文法的要素に変化する過程。その際、統語上の独立性や語彙的意味の消失、さらには、音声的摩滅なども通常伴う」と述べ、宮下 (2006: 21) は「形態論的・統語論的に、文法が生じてくるプロセス」と述べている。文法化理論を体系的にまとめた Hopper and Traugott (2003) は、「文法化」という用語を以下のように定義している: (i) どのようにして文法的形式と構造が出現し、使われ、言語を形作るかという、言語現象を説明する研究の枠組み、(ii) 語彙項目が歴史とともにより文法的になる過程を表す言語現象。文法化研究における 2 つの観点として、(i) 歴史的研究 (文法的な形式の源をさぐり、文法変化における典型的な道筋を追究する)、(ii) 共時的研究 (統語的・談話語用論的現象として、言語使用を流動的パターンとして研究する) を提示している。山梨 (1995) は、(ii) の共時的側面に関わる事実が、(i) の通時的側面から独立している保証はないとし、汎時的研究の重要性を述べている。

2.2 動詞 go の文法化

英語にみられる動詞の文法化の代表的事例として、動詞 go の *be going to*, *be gonna* への文法化が挙げられる。以下、Hopper and Traugott (2003) における議論を参照し、本動詞から現在進行形、さらに未来形への品詞的特質の変化、再分析、音韻縮約といった「文法化」の特徴をみていく¹。

- (1) a. I am going to marry Bill.
 b. I *am going to* go to London.
 c. I'm *gonna* go to London. (cf. Hopper and Traugott 2003: 2-3)

(1a) は現代英語における「現在進行形」の用法を表している。Hopper and Traugott (2003) の説明によると、「行く」という意味の本動詞であった動詞 go が (1a) のように用いられるとき、目的を表す *to* 不定詞句が未来のことを指すため “*be going to*” が未来の意味を持つようになっていく。さらに、(1b) のように、「目的」解釈とは異なる文脈で用いられるようになったという。(1b) における変化は「再分析 (reanalysis)」と呼ばれ、以下の (2) のように表される。

- (2) [I am going [to marry Bill]] → [I am going to marry Bill] (cf. *ibid.*: 3)

最後に、(1c) のように、*-ing* と *to* の間に句の境界線がなくなっていき、*going to* が *gonna* という一語として発音されるようになった。この現象を「音韻縮約 (phonological reduction)」と呼ぶ。(1) は、それぞれが「文法化が起きている」という証拠を示す例となっている。

Hopper and Traugott (2003) の説明によれば、以上の変化は、15 世紀またはそれ以前に初めて起こったが、*be going (to...)* の文法化の様々な段階は、現代英語においても共存している。文法化の過程において、動きや方向性といった go の具体的な意味が失われ、未来という「時間」の意味など、抽象的で話し手に関わる意味が新たに加えられていく。

2.3 文法化のメカニズム

動詞 go が文法化に伴い時制標識という助動詞的機能を得たように、文法化には、統語・音韻面における一定の変化の傾向がみられるとされている。秋元 (2002) によると、文法化は、一般的に「内容語から機能語へ」という一方向性 (unidirectionality) をもって進んでいく。そのメカニズムには、語用論的推論 (pragmatic inferencing)、意味の漂白化 (bleaching)、一般化 (generalization)、脱範疇化 (decategorization)、重層化 (layering)、保持化 (persistence)、分岐化 (divergence)、特殊化 (specialization)、再新化 (renewal)、再分析 (reanalysis) という様々なプロセスが関わっているとされている。本論においては、

以下の「脱範疇化」、それに伴う「意味の漂白化」が重要である。

Hopper and Traugott (2003) では、*considering* が前置詞化していくプロセスに、名詞・動詞などの主要な文法範疇にみられる形態論的・統語論的特性を失い、前置詞・接続詞などの特性を持つようになる「脱範疇化 (decategorization)」という文法化のメカニズムが関わっていると述べている。この変化は「範疇性の漸次変容」として以下のように示される。

(3) 範疇性の漸次変容 (cline of categoriality)

major category (> adjective / adverb) > minor category

(大きな文法範疇 > 形容詞・副詞 > 小さな文法範疇)

(Hopper and Traugott 1993: 104)

大きな文法範疇 (major category) とは名詞・動詞 ('open' category、すなわち新たに語彙が入りやすい)、小さな文法範疇 (minor category) とは前置詞・接続詞・助動詞・代名詞・指示代名詞 ('closed' category、すなわち新たに語彙が入りにくい) ということの意味する²。形容詞・副詞は両者の中間に位置し、形容詞は(分詞的)動詞から、副詞は場所 (locative)・様子 (manner) などを表す名詞から派生する場合が多いといわれる。この流れは、あらゆる minor category は、通時的に major category が元となっているという「一方性理論 (一方性仮説)」といわれる (ibid.: 107)。

Hopper and Traugott (2003)では、動詞の文法化が進行するとともに、時制・相・法・人称・数の一致という動詞的性質は損失されていく可能性があると言われている³。

(4) a. *Carefully considering / Having carefully considered all the evidence, the panel delivered its verdict.*

b. *Considering (*Having carefully considered) you are so short, your skill at basketball is unexpected.* (ibid.: 105)

ここでの分詞動詞 *considering* は、(4a) では文字通り理解されて動詞の特徴を示しているが、(4b) では接続詞として理解され、動詞的特徴を示さない。(4a) で分詞 *considering* は副詞 *carefully* によって修飾され、現在時制または過去時制を表す形式となっており、同時に、主節の主語と同じ主語を補うことができる⁴。一方、(4b) の *considering* では、このような動詞的特徴がみられないということが指摘されている。

また、文法化の進行に伴い、動詞の意味の「漂白化 (bleaching)」がみられる。漂白化とは、文法化する以前の動詞がもっていた意味が失われていくことを指す。Hopper and Traugott (2003) においては、文法化は意味内容の喪失を伴い、文法化した形式が徐々に統語的・形態的になっていくにつれ、意味を失っていくことが指摘されている。文法化によって加わる語彙的意味は、比較的抽象的であり、時・役割関係・連結性などにかかわる意

味、すなわち「文法的意味 (grammatical meanings)」となる傾向があるという (*ibid.*: 98)⁵。また、Radden and Dirven (2007) では、漂白化の一例として、文法化して前置詞的性質をもつようになった *following* が、「時間的前後関係」を表す意味からさらに文法化して「因果関係 (because of)」の意味をもつようになったと指摘されている。

(5) Dickens died in 1870 *following* a collapse. (Radden and Dirven 2007: 36)

(5) の *following* や日本語の「雨降って地固まる」という表現のように、因果関係を表す表現は、前に起こった出来事 (event) が、次に起こった出来事の原因として解釈されることが原因となっているという。このような推論によって誘発される語・表現の語彙的意味拡張が、新たに習慣化された文法的形態・意味を得るという文法化の経路を辿る可能性があるという。Radden and Dirven (2007)の説明によれば、同様の例は、*post hoc, ergo propter hoc* (after that, therefore because of that) のように、論理的推論における誤謬の典型例として古典的に存在している。

語が文法化していくのに伴って生じた文法的意味が、元の語がもっていた意味と共存していくことがある。これは、Hopper (1991) において「重層化 (layering)」と呼ばれている。その一例として、Fukaya (1997)は、文法化して新たに時間的な意味を持つようになった *following* は、古い前置詞 *after* とともに現代英語において容認されており、両者が入れ替わっていないということを指摘している。具体例として、以下が挙げられている。

(6) *except / barring, about / concerning, except / excepting, in spite of / notwithstanding, because of / owing to, until / pending, about / regarding* (Fukaya 1997: 288)

Fukaya (1997) は、新たな層となった意味が、以前より存在していた層より低い頻度にて用いられるという Hopper (1991) の重層化 (layering) 原則の証拠として、COBUILD コーパスにおいて *except* が検出例 404 例であったのに対して *barring* が 10 例、*in spite of* が 111 例であるのに対して *notwithstanding* が 32 例、*because of* が 2048 例であったのに対して *owing to* が 53 例であったことを挙げている。文法化して新たな層となった *barring, notwithstanding, owing to* のコーパスにおける検出数は、古くから存在していた層である *except, in spite of, because of* と比較して少ない。

2.4 動詞派生前置詞

「動詞派生前置詞 (deverbal prepositions)」という用語は、Kortman and König (1992: 672) において用いられており、この現象は幅広くの言語に見られ、典型的には分詞、動名詞などを含む副動詞 (converbs) から発達したものとされている。英語においては、以下のような現象が一例となるとされている⁶。

- (7) during, pending, concerning, considering, bar, barring, excepting, expected, notwithstanding, according to, past, ago; considering (that), seeing (that), being (as how, that), etc. (ibid.)

Kortman and König (1992: 673) では、文法的・意味的・音韻的变化を経て、動詞が前置詞として再分析された例とされている。そして、英語・フランス語にみられる動詞派生前置詞のおよそ4分の1は、接続詞としての役割も果たすと述べられている。Kortman and König (1992) は、自由付加詞 (free adjuncts) をとることができないという点で、中心的な前置詞の大部分とは異なる性質をもつと述べている。また、特徴として、歴史的観点からみると、「短命であること」が挙げられている。再分析された項目の多くが英語において廃語となっていく理由として、部分的には、フランス語・ラテン語からの借用語、語義借用が多いことを挙げている (例として、withstanding, outtaken, outnomen)。これら多くの例では、分詞の廃退は、基底となる動詞語幹の退廃の自然な結果であったという。しかし、この説では、基底となる動詞語幹が現存しているにもかかわらず使用されなくなった、動詞派生前置詞 lasting, continuing, reversed や、動詞派生接続詞 conditioned that, foreseeing that などの事例を説明することができない (Kortman and König 1992: 683)。

秋元 (2002) は、OED を用いて concerning, considering, regarding, relating to の前置詞用法の考察を行い、文法化現象の一例であると指摘している。また、児馬 (2001) による save, saving の文法化研究、川端 (2001) による provided / providing の研究がある。両者は OED やコーパスを用いて文法化現象との関連を考察している。また、内田 (2003) では、「-ing 型前置詞」としての including の分離後置用法のテキスト中における役割に関して、including で結ばれた名詞句の表す複数の実態間に存在する包含関係を表現するだけでなく、そこまでに述べてきた内容を受けて、その具体例を導入することによって話題を展開するテキスト構成辞としての接続詞的機能を持っていることが指摘されている (ibid.: 118)。

2.5 先行研究再考と本研究の位置づけ

以上、文法化と動詞派生前置詞の先行研究を概観してきた。本研究においては、動詞派生前置詞の事例研究として excluding を取り上げる。本論の目的は、特に文法化の「脱範疇化」に着目し、excluding の変化の過程を、文法化の「範疇性の漸次変容」の中に位置づけ、記述することである。excluding を本論が取り上げる意義は、(i) 管見の限りにおいて excluding を扱った先行研究が存在しないこと、(ii) excluding の記述を行うことによって、including の先行研究との比較・対照を行い、用法・分布の差異を確認する余地が生まれること⁷、(iii) 同じく「除外」の意味を持つ動詞派生前置詞 saving との対比ができること、が挙げられる。

川端 (2001: 97) が指摘しているように、動詞派生前置詞を扱った研究は少なく、さらに現象ごとの語源・発達過程が異なるため個別の事例研究が必要とされている。たとえば、児馬 (2001: 85) は、考察において「saving が前置詞化したことを示すためには単一の NP

補部を取っていることを示すだけでは不十分で、その補部の意味に着目して、動詞 *save* の本来の意味が希薄になっていること (*bleaching*) を示さねばならないということである」と述べている。ここで、児馬 (2001) の指摘は、本論における *excluding* の分析においても重要な意味を持つことに注意されたい。なぜなら、前置詞化したとされる *excluding* は動詞の意味の漂白化がみられず、動詞 *exclude* の意味が保持されていると考えられるからである。つまり、「動詞の意味は失われていない」ということになる。*excluding* に前置詞としての性質がみられるか否かを明らかにするためには、漂白化以外にも注目せねばならない。

3. 「範疇性の漸次変容」における-ing 分詞

本節では、4 節における議論の先駆けとして、3.1 節に示す安藤 (2005) の示す品詞の分類に基づき、続く 3.2 節において、その特質と振る舞いに従い、文法化の範疇性の漸次変容における「-ing 分詞」の位置づけを行う。そして、3.3 節において、それらのカテゴリーのうち、*minor category* に属する、動詞派生前置詞としての *excluding* を規定する、統語的パラメーターの検討を行う。これらの検討は、本論における「動詞派生前置詞」の同定に関わる 4 節以降の議論の根幹となる。

3.1 現在分詞

本節では、本論で用いる「現在分詞」という用語について整理する。基本的には、以下の安藤 (2005: 231) の「-ing 分詞」に準ずる。

- (8) 現在分詞と過去分詞は、一般に用いられている用法ではあるが、両者は時に関係なく用いられるので、適切な名称とは言えない。また、現在分詞を *first participle*, 過去分詞を *second participle* と呼ぶのは恣意的であり、前者を *active participle*, 後者を *passive participle* と呼ぶのも適切ではない。*fallen leaves* (落葉) のような自動詞の過去分詞には受動性がないからである。最も適切な名称は、形式に基づく *ing 分詞*, *en 分詞* であろう。(*ibid.*)

また、-ing という形式をもつ「現在分詞」は、以下 (9) の動詞的性質、(10) の形容詞的性質をもつことに注意されたい。こちらも安藤 (2005: 231-232) に準ずる。

(9) 動詞的性質

進行形 : *John is working now.*

(10) 形容詞的性質

a. 限定的用法 : *The following day was rainy.*

b. 叙述的用法 :

b-1. *Our math teacher is so boring.* [主語補語]

b-2. I found the book very *interesting*. [目的語補語]

(*ibid.*)

3.2 「範疇性の漸次変容」に基づく品詞カテゴリーの分類

2.3 節においては、(3) に示されるように「内容語から機能語へ」、「major category (語彙項目) から形容詞・副詞を経て minor category (文法項目) へ」という文法化の「一方向性」の仮説があることをみてきた。本節では、安藤 (2005) の品詞の定義に基づき、品詞ごとに見られる特徴を、(3) における major category, minor category に位置づけていくことを提案する。

英語における品詞とは、50 万を超える語を、形式と文中の働き (機能) によって分類したものであり、伝統的に「名詞 (noun)・代名詞 (pronoun)・形容詞 (adjective)・動詞 (verb)・副詞 (adverb)・前置詞 (preposition)・接続詞 (conjunction)・間投詞 (interjection)」という 8 つの品詞として定義されている (安藤 2005: 5)。本論では、以上の品詞を、「範疇性の漸次変容」に基づき、(11) のように分類を行うことを提案する⁸。

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| (11) a. 名詞・動詞 | [major category / 内容語] |
| b. 形容詞・副詞 (現在分詞、過去分詞) | |
| c. 代名詞・前置詞・接続詞・間投詞・冠詞 | [minor category / 機能語] |

本分類の利点は、Hopper and Traugott の文法化理論の major category, minor category という概念が、「内容語」「機能語」という区分と合致しているところにある。以下、具体的に各カテゴリーの特徴を述べていく。

(11a) に属する名詞・動詞は、文法機能をになう (11c) と比較して、多種多様な「意味」を表す「語彙項目」としての性質を持っている (この性質は、文法化理論における major category の特徴に合致する)。major category は、意味的性質が強く、新しい語彙が増えやすいという性質を持っている。これに関しては、名詞・動詞には同義語・類義語が多数存在するのに対して、(11c) には同義の文法項目がごく少数しか存在しないことを考えると妥当であるといえよう。たとえば、「国」を表す英単語・類義語は、「名詞」のみであっても country, land, territory, domain, realm, domination, state, nation, policy, shores (cf. 新和英大辞典) と多岐にわたる。一方、「未来」を表す文法標識として助動詞 will, be going to が挙げられる。他の「未来」を含意するものとして be about to, be to などが挙げられるが、「国」をあらわす名詞の類義語と比較して、多数の類義語が存在しないといえる。これらの言語事実も、(11a) という分類の妥当性を支持する重要な一例となる。

また、名詞・動詞の特徴として、(4a) のように、数・時制などによって形が変化するという特徴がある (一例として、名詞の「単数形・複数形」、動詞の「三人称・単数・現在の -s」「過去時制における規則変化・不規則変化」、「現在進行相の -ing」が挙げられる)。一方、(11c) の文法項目は、(4b) に示されているように、これらの特徴を示さない。法助動詞 may, can, will のように、過去形とされる形 (might, could, would) をもつものも存在し

ているが、法助動詞の「過去形」という形は分類上の便宜によるものであり、「過去形」とされる *might, could, would* が過去時制において用いられる場合は「仮定法」である可能性が高く、現在形の *may, can, would* と同様の「可能」「義務」用法の意味において用いられていない可能性がある。たとえば、過去時制において「未来」を表すときには *would* ではなく *be going to* が好まれ (Berk 1999: 143)、「可能」の意味を表す場合は *be able to* が用いられ、*could* を用いるのは非文となる (Berk 1999: 144)。従って、これらの事例は、例外的なものとして扱うべきである。*be, do, have* については、江川 (1991: 193) のように「動詞であるが、助動詞としての役割も果たす」例外的存在として扱うべきであろう。助動詞としての *be, do, have* は、「語彙的な意味を持たない」という点では *minor category* に属するものであるといえる (安藤 2005: 161)。

(11b) の形容詞・副詞は、*major category* と *minor category* の中間的な特質を持っている。文法化という観点からは「分詞」というカテゴリーが該当する。分詞、すなわち「現在分詞 (*ing form*)」と「過去分詞 (*en form*)」は英和辞典 (たとえばジーニアス英和辞典、リーダーズ英和辞典) においては「形容詞」と分類されているが、動詞が変化したものであり、動詞としての性質とともに、名詞を修飾するという点で形容詞としての性質も持っている (安藤 2005: 231)。「分詞」へと文法化した動詞は、主節に対する従属節をつくる「分詞構文」としての働きをもつ。すなわち、副詞としての性質ももつといえる (安藤 2005: 241)。このように、動詞の「文法化」という観点の導入は、形容詞・副詞という品詞カテゴリーに対して新たな視座を提供するとともに、「分詞」の形容詞的・副詞的性質を、動詞・文法項目の中間的存在として位置づけることを可能とし、これらの品詞は「範疇性の漸次変容」においては *major / minor category* の間の中間に位置する存在として位置づけられている⁹。

3.3 動詞派生前置詞の規定

それでは、動詞派生前置詞を規定するには、何が必要か。本節では、先行研究を基に動詞派生前置詞であることを規定する条件を検討していく。ただし、本論においては、究極的には、動詞派生前置詞と形容詞・副詞の性質は連続的であり、区分は厳密には難しいという立場をとる。本論では、「動詞派生前置詞」の規定において、分詞と連続的であるということを念頭に置きつつ、分詞の中でも「懸垂分詞性の高いもの」、すなわち「分詞節における意味上の主語が、主節における主語と異なるもの」を動詞派生前置詞に属するものとして扱う。この規定は Fukaya (1997) の *including* に関する言及に基づく。

Fukaya (1997: 287) は、文法化の段階性 (*gradualness*) を示すためには、*-ing* にて終わる前置詞の特徴として、主語解釈 (*subject interpretation*)、前置詞随伴 (*pied piping*)、前置詞残留 (*stranding*)、そして前置詞的副詞 (*prepositional adverbial*) という前置詞の特徴を吟味し、*during, according to, concerning, following, notwithstanding* を、他の動詞派生前置詞より前置詞的特性が強いものと位置づけている。また、Fukaya (1997) は、*including* の前置詞用法と分詞用法の連続性を指摘している。以下の例を参照されたい。

- (12) a. They had some good players, *including* Tommy Smith and Ian Callaghan, who had both played in the 1965 final.
 b. ...Nell responded, and she smiled warmly at Funny and Val, *including* them in this statement. (Fukaya 1997: 295 斜体部分筆者)

(12a) の *including* は2つの言語要素間の、全体と部分の関係を促進する前置詞、(12b) は分詞節上の主語が主節の主語 Nell と一致する分詞構文であるとしている。このように、主節と分詞節上の主語が一致しないものは、懸垂分詞と呼ばれている(早瀬 1992, 2007, 2009)。早瀬 (2007) においては、これらの懸垂分詞は規範文法において破格であるとされるが、実際にはかなりの多くの例が発見され、慣用化されイディオム化されているものであると述べられている。早瀬 (2009) は、懸垂分詞構文には「概念化者が自らの行為の結果、ある状態・事態を知覚・経験する」という独自の意味を見出し、懸垂分詞節の主節が「発話の場」の参与者である、言語上は明示化されない概念化者の知覚内容として捉えられ、話者の「内」の視点から事態把握が行われる、主体性の度合いが高い意味を備えた構文であるとしている。そして、懸垂分詞が容認されるパターンは、懸垂分詞節の非明示である主語が、動作主性を発揮して行った事態の結果、ある知覚経験を得たことを表している場合であると述べている¹⁰。

林 (2013) は、動詞派生前置詞を規定するパラメーターとして、丸田・平田 (2001) において述べられている、Emonds (1976)による以下の判別テストを用いて母語話者の内省に基づく調査を行った。丸田・平田 (2001) は、Emonds (1976) を引用し、分裂文を前置詞句 (PP) と副詞を区別するテストとして用いることができると述べている。(13), (14) のように、強調される要素(斜体部)が現れる部分には、通例、名詞句 (NP) か PP しか現れることができない。

- (13) a. It's *the custard pie* that I disliked. (NP)
 b. It was *a tax break* that was counted on. (NP)
 c. It was *to John* that she spoke. (PP)
 d. It is *with great pleasure* that I presented our speaker. (PP)
 (14) a. *It was *too carefully* that she spoke. (AdvP)
 b. *It's *very unhappy* that Bill is. (AP)
 c. *It is *blow up some buildings* that you should. (VP) (Emonds 1976: 133)

丸田・平田 (2001) は、従来、副詞的要素と考えられていたものもこの位置に現れることができるので、(15), (16)のように、自動詞句 P を主要部とする PP と見ることができるとしている。

- (15) a. It was *afterwards* that the news broke.

- b. It's *upstairs* that we have to beat. (Emonds 1976: 174)
 (16) It was *before* that I saw John. (丸田・平田 2001: 122)

林 (2013) はこのテストを援用し、分裂文への書き換えテストが、前置詞を規定する 1 つのパラメーターとなり得ると想定し、動詞派生前置詞の例文を基に *It is...that* の分裂文に書き換え、母語話者による容認度の判定を行った。その結果、*excluding* は分裂文を用いたテストによると前置詞として容認されるということを示した。また、林 (2013) では、以下の丸田・平田 (2001) の「当該の句が典型的な PP (前置詞句) と等位接続できれば、その句も同じ PP の資格をもつとみなすことができる」という「等位接続テスト」を用いて、(17b) の *during* が前置詞 *before* と等位接続されていることから、前置詞としての資格を持つと判定できることを指摘している。(17a) は丸田・平田 (2001) における例であるが、*down* と等位接続していることから、(17a) の *in* は PP であることがわかれると述べられている。

- (17) a. He rushed *in* and *down* the stairs. (丸田・平田 2001: 123)
 b. Most of the Korean residents here were forcibly brought *before* and *during* World War II. (ジーニアス英和大辞典)

以上より、本節でみた動詞派生前置詞であることを規定する条件は、以下のようにまとめられる。

- (i) 分詞節上の主語が、主節の主語と一致しない。
- (ii) 分裂文テストが容認される。
- (iii) 前置詞としての資格を持つものと等位接続される。

本論では、以上のうち (i) (iii) を、動詞派生前置詞を規定するパラメーターとして考察を行う¹¹。

4. OED による *excluding* の分析

excluding の前置詞用法は、ラテン語の絶対構文に由来し、19 世紀に発達したとされている (Görlach 1991: 109)。OED によると、初例は 1581 年である。

果たして、*excluding* は、動詞派生前置詞といえるほど文法化が進んでいるのであろうか。OED に収録されている *excluding* については、「前置詞」と分類されている用法はない。そこで本節では、OED CD-ROM より得られた *excluding* の用例 129 例に関して、用法の分類を行い、文法化との関係についても考察を進めていく。*excluding* は、どのような歴史的変化を遂げてきたのであろうか。動詞派生前置詞として位置づけることができるのか。動詞派生前置詞として位置づけることができるのであれば、脱範疇化を経た後にも、

動詞的・形容詞的性質は観察されるのであろうか。「動詞派生前置詞」として位置づけるのであれば、そのための必要十分条件とは何であろうか。以上の問いに対する答えを導き出すため、4.1 節では「前置詞」とする辞書の記述を参照し、4.2 節では OED を用いて具体的なデータを提示し、分類と記述を行う。そして、4.3 節においては、4.2 節のデータに基づき文法化との関係を論じ、文法化理論の反例ともみられうる言語事実の分布における傾向を指摘する。

4.1 辞書における *excluding* の記述

excluding は、いかなる品詞に属するのか。ここでは、辞書の用例を引用し、その分類における問題点を指摘する。結論を先に述べると、「前置詞」という分類が辞書において行われているが、「なぜ」前置詞と呼ぶことができるのか、その証拠となる具体的な根拠は提示されていないといえる。

- (18) a. (prep.) not including: Lunch costs £10 person, *excluding* drinks. (OALD)
 b. (前) ...を除いて (ジーニアス英和大辞典)
 c. (prep.) ...を除いて (opp. including) (リーダーズ英和辞典)

以上の定義をみると、前置詞 *including* の対義語であり、前置詞に分類されている。そして、「形容詞」とされている分類は存在しない¹²。ここで、3.3 節の基準を用いると、(18a) は、*excluding drinks* という事態認知を行っている概念主体（おそらく文の発話者）の存在が、*excluding* の主語として考えられ、主節の主語である *lunch* と分詞上の主語が一致していないと考えられる。従って、(18a) は、分詞より逸脱的な、すなわち、より懸垂分詞的な例であると位置づけることができる。ただし、なぜ *including / excluding* が「前置詞」と呼ばれるに至ったのか、これらは真の意味で「対義語」と呼べるのか、という疑問についての解は示されていない¹³。

4.2 -ing 分詞 '*excluding*' の下位分類

本論においては、*excluding* の用法を、3.2 節の議論を基に、「範疇性の漸次変容 (cline of categoriality)」に位置づけていく。具体的には、以下の (19) のように分類を行う。

- (19) a. major category: 名詞、動詞としての性質をもつ
 b. adjective / adverb: 形容詞的・副詞的性質を持つもの
 c. minor category: 主語不一致による懸垂分詞的なもの、前置詞としての性質をもつもの

基本的に、(19)の各用法は連続的であり、特に (19b) と (19c) のうち、懸垂分詞的な用法、動詞派生前置詞の用法は連続的であり、厳密には区別が難しいと考えられる。

結果は表 1 の通りである。なお、全検出例は 129 であるが、例文が重複して検出されたもの、名詞句のみで完結して文となっておらず判定不可能であるもの、文脈から意味の解釈が困難であるものは分類の対象外として除外している。従って、「計（合計）」が 3 項目の合計に満たないものは、分類の対象外となっており除外されていると考えられたい。

表 1 -ing 分詞 *excluding* の下位分類

	major category	adjective /adverb	minor category	計
1550-1600	2	0	1	3
1600-1650	1	1	6	8
1650-1700	5	1	1	8
1700-1750	1	1	2	4
1750-1800	4	0	1	6
1800-1850	7	4	3	13
1850-1900	11	4	7	25
1900-1950	5	16	6	27
1950-2000	7	20	1	31

この分布から、minor category は増加傾向を示していないが、adjective / adverb は増加していることがわかる。以下、具体的な例文とともに、それぞれの項目について、その特徴とともに具体的な記述を行う。

(i) Major category

動名詞としての振る舞いを見せるものと、動詞としての振る舞いを見せるものがある。まず、前者に関しては、冠詞を伴う、または前置詞 *for*, *of*, *as*, *by*, *after*, *in*, *to* などの目的語を伴う。初例は (20a) の 1581 年。前置詞の目的語となる初例は (20b) の 1591 年。

- (20) a. The life and the health of the body is nothing els, but an *excluding* of death and Sickenesse. (1581 J. Bell Haddon's Answ. Osor. 505 b)
- b. This causeth the Emperours to..be very warie for *excluding* of all peregrinitie that might alter their fashions. (1591 G. Fletcher Russe Commw. (Hakl. Soc.) 151)

なお、以下の (21) のように、副詞と共に起する例がある。

- (21) A system of this kind, a limited group of words forming some kind of range or scale of *mutually excluding* terms is often called a lexical set.
(1967 R. A. Waldron Sense & Sense Devel. v. 102)

歴史的な分布をみると、16世紀後半から現代に至るまで存在している用法であるといえる。

次に、動詞的用法に関して、この用法は、be動詞とともにあらわれ、進行相を表す。(19c) に関しても、関係代名詞の省略 (which/that + be動詞) とみれば厳密には進行相といえるかもしれないが、本例は文の主語・be動詞・現在分詞 (進行相) が明示されているパターンを指す。be動詞が明示されているという点で (19c) とは異なることに注意されたい。以下の1例のみが該当する。

(22) When I excluded Wilfred Owen..I did not know I was *excluding* a revered sandwich-board Man of the revolution. (1936 W. B. Yeats Lett. on Poetry (1940) 124)

(ii) Adjectives / adverbs

現在分詞のうち、「名詞を修飾する」、「比較級をもつ」という形容詞的用法をもつものがある。初出は1641年。形容詞用法は、前置・後置修飾 (限定・叙述用法) の2通りをもつ。限定用法としては、(23a) では限定詞と名詞 Party の間に現れているという形容詞の限定用法 (前置修飾) などがある¹⁴。また、(23b) においては、比較級であることに着目されたい¹⁵。限定用法 (前置修飾) の最終例は1925年である。その後は用例がみられない。

- (23) a. If the Head of the including Faction, offers the Head of the *Excluding* Party, to assist him..in the Election of one of the Excludents, let him alwayes be suspicious. (1670 G. H. Hist. Cardinals iii. iii. 329)
- b. E A sect of..Methodists, more dismal and *more excluding*. (1836. Howard R. Reefer vi)

形容詞的用法には、さらに、名詞に後置修飾され、主語が明示されている、叙述用法的なものもある (cf. 安藤 2005: 232)。これらの特徴は、名詞の直前の主語が、-ing 分詞の意味上の主語を表しており、excluding の意味上の主語が明示されているという点である。初例は1641年の以下の例。

(24) A power of remitting sinnes, which we hope he will not ingrosse to Bishops *excluding* Presbyters. (1641 Vind. Smectymnuus §7. 95)

その後、19世紀に再び出現し、20世紀にかけて頻度が上昇するのが特徴である。この時期における用例は以下。

- (25) a. He must be prepared with a cautioner..at giving in his defences, unless he instantly verify a defence *excluding* the action. (1838 W. Bell Dict. Law Scot. 1028)

- b. How far would the majority go in applying the general rule excluding what are sometimes called self-serving statements to conduct?

(1958 Listener 18 Sept. 412/2)

ただし、後置修飾的なものの中には、-ing 分詞の意味上の主語が明示されていないもの、すなわち、-ing 分詞の直前に意味上の主語となる名詞が明示されていないものが存在する。この場合、主語を推測する必要がある。(26) はその例である。ここでは、*excluding my selfe the true heyre* の意味上の主語が明示されていない。

(26) After his [Alexander's] death Vrbanus dealt very inurbanely: for hee drewe

Mamphred in, *excluding* my selfe the true heyre. (1610 Bp. Carleton Jurisd. 221)

(iii) Minor category

主節の主語と意味上の主語が一致しない懸垂分詞的なもの、あるいは動詞派生前置詞用法の *including* との等位接続から、動詞派生前置詞と予測されるものである¹⁶。まず、主節の主語と一致しない、懸垂分詞的な例が 10 例みられた。これには (27) などがある。

(27) [A Metal] may comprehend both those that are strictly called Metals (not *excluding* common argent vive to be one) and those that are also called semi-metals, as

Antimony and the like. (1671 J. Webster Metallogr. 89)

その後 20 世紀に至るまで存在しており、現在英語においてもみられる例として存続している。

including との等位接続がみられる例は、以下の 2 例が見られた。初例は (28a) の 1849 年である。

(28) a. 'Lay-days'..are either running-days, or working-days, as may be agreed upon; the former *including* Sundays and holidays, the latter *excluding* them.

(1849 Freese Comm. Class-bk. 41)

b. The term 'plastic materials' is here employed in a restricted sense, *including* only such materials as celluloid and its numerous substitutes, which can easily be shaped by cutting and grinding, as well as by molding, and *excluding* artificial textile fibers and India rubber and its imitations.

(1912 Sci. Amer. Suppl. 20 Apr. 246/1)

歴史的な位置づけとしては、*including* の前置詞用法と等位接続される前置詞的用法として、*excluding* と対称性をもつ形にて 19 世紀中旬から 20 世紀前後にみられている。

4.3 excluding の歴史的変化における考察

ここでは、4.2 節における記述に基づき、文法化現象との関係を考察する。本節の構成は以下の通りである。まず、4.3.1 節で、excluding の変化を文法化の観点から考察する。そして、4.3.2 節では、文法化理論の「一方向性」の仮説に対する反例としての excluding の意義を述べる。最後に、4.3.3 節では、本論の総括として、以上の考察から導かれる excluding の言語変化における特質を記述する。

4.3.1 文法化の観点から

4.2 節での事例の観察結果から、excluding は、以下の点で文法化を指摘することは難しいといえる。

- (29) a. 意味の漂白化が起きていない。
- b. 初期から前置詞的用法と連続性をもつ用法が既にみられる。
- c. including との等位接続関係は2例みられるが、証拠としては不十分。

(29a) については、concerning, regarding, relating to, touching (cf. 秋元 2002: 190)、saving (cf. 児馬 2001: 85) などの例のように、動詞の意味が漂白化していくという特徴がみられない。従って、excluding が動詞から前置詞へと文法化していくことを示す上で、動詞の意味の喪失を文法化の証拠として指摘することができない。(29b) については、動詞派生前置詞的用法と連続性をもつ (iii) の用法が既に16世紀からみられているという点からも、この用法は、それより以前の時代から存在していた可能性が高く、その起源を辿るためにはさらなる言語史料を検討していく必要があり、本論の調査範囲からは決定的な証拠を提示することができない。(29c) に関しては、including との等位接続関係を示す(28)の各例は、including / excluding が同等の性質を持っているといえる1つの根拠となり得るといえるだろう。しかし、ここで excluding を動詞派生前置詞と断定するには次の点に留意せねばならない。一つ目は、including が前置詞であることを証明する必要があること。二つ目は、including を OED または BNC などのコーパスを用いて検索すると、excluding とは頻度が大きく異なり（前述の通り、including の方が、頻度が圧倒的に高い）、両者の間には非対称性が存在すると予想されること。以上2点に関してはさらに精査が必要である。

4.3.2 一方向性の反例として

一方で、本論の調査結果は、文法化理論の通説である「範疇性の漸次変容」、「一方向性」の仮説に対する反例となる可能性がある。文法化の進行に伴い、徐々に主語支配から自由になっていくとされ、秋元 (2002: 190) においても concerning, considering, regarding, relating to, touching の歴史的変遷にそのような傾向が見られると指摘されている。しかし、主語支配が弱まる (iii) の懸垂分詞的用法から、徐々に excluding の意味上の主語が明示される用法、つまり「形容詞的特質」をもつ (ii) の関係代名詞的な用法へと変化していくと

いう本論の結果は、その流れに逆行する傾向を提示している。これこそが、本論の結果が示しうる重大な **excluding** の歴史的変化である。すなわち「一方向性」という文法化の仮説への反例であるということである。

4.3.3 まとめ

以上を踏まえて、**excluding** は、前置詞的振る舞いをする事例の中でも動詞的性質が極めて強くみられるものとして位置づける必要があると考えられよう。本論を通して明らかになった、**excluding** の歴史的変化における顕著な点は以下のようにまとめられる。

- (30) a. 19 世紀後半以降、いわゆる分詞構文の用法としては典型的には破格とされる、主語不一致の懸垂分詞的な用法がみられるようになっていく傾向がある。同時に、**excluding** の意味上の主語を明示する関係代名詞的な用法の導入が、19 世紀以降、特に 20 世紀にかけてみられるようになる。
- b. 数は少ないが、17 世紀から 20 世紀にかけて、比較変化がある、限定詞と名詞の間の位置に出現するという形容詞的性質を示す例がみられる。
- c. 副詞との共起がみられる。動詞としての性質が強くみられる動名詞用法とともに文法化が進み前置詞的性質の強い (iii) の懸垂分詞的な用法においても副詞との共起がみられる。
- d. 20 世紀後半、文頭としての地位を得るようになったという点では、主語支配から自由になり、前置詞としての性質を持つようになったとみることができる。

(30a) に関して、**excluding** は、OED でみると、主節と従属節の主語不一致の懸垂分詞な用法と考えられる例が、特に 19 世紀後半から 20 世紀にかけて増加していく傾向がみられる。ただし、意味的には **but**, **without**, **for** と同じく「除外」であるため、意味が漂白されておらず、段階的に **minor category** へと範疇が変わっていると考えられる。その一方で、**excluding** の直前に意味上の主語が明示される関係代名詞的な用法の増加もみられるため、結果として、19 世紀以降、**adjective / adverb** に属する用例数が増えていると考えられる。(30b) に関しては、(iii) の例に加え、**sun-excluding**, **dust-excluding** のように、複合語の形をとるものなど合計 5 例がみられた¹⁷。(30c) に関しては、動名詞の共起例である (31) や、文法化が進み前置詞としての性質に近づいた懸垂分詞的な事例の共起例である (32) が証拠となる。特に、動詞との共起例である (31) は 19・20 世紀にみられるが、(32) がみられるのは 20 世紀に入ってからであることから、20 世紀に入ってから文法化が進み、前置詞的な性質が強くなっている可能性があるともみることができよう。

- (31) a. The Continental System, based on the project of *totally excluding* British goods and manufactures from all the European monarchies.
(1839-57 Alison Hist. Europe VII. xlii. §43. 125)

- b. A system of this kind, a limited group of words forming some kind of range or scale of *mutually excluding* terms is often called a lexical set.

(1967 R. A. Waldron *Sense & Sense Devel.* v. 102)

- (32) a. We must..enter into the mind and attitudes of past periods and accept their standards *deliberately excluding* the intrusions of our own preconceptions.

(1949 Wellek & Warren *Theory of Lit.* iv. 32)

- b. There is no principle of evidence *especially excluding* 'self-serving' statements by an accused or by any one else.

(1904 J. H. Wigmore *Treat. Syst. Evidence* III. lvii. 2273)

最後に、(30d) に関して。4.3.2 節では、*excluding* が一方向性の仮説に対する反例と述べたが、前置詞的な用法が拡大していったかもしれないと考えることができる用例も存在する。それは、*excluding* が文頭の位置にあらわれる、以下の例 (33) である。

- (33) *Excluding* films obtained from persons homozygous or heterozygous for haemoglobin C, a high percentage of target cells in normal blood films has been observed in Ghana, Nigeria, and from East Africa. (1969 Edington & Gilles *Path. in Tropics* x. 353)

秋元 (2002: 190) は、*considering*, *concerning* は、前置詞の地位を得ると文頭にくることができるということを述べている。これらの動詞派生前置詞は、文頭にくることにより、取り出しなどのテキスト的機能を発達させたということを述べている。内田 (2003) においても、*including* がそこまで述べてきた内容を受けて、その具体例を導入することによって話題を展開するテキスト構成辞としての接続詞的機能を持っているということを指摘しているが、*excluding* に関しても、同様の性質がみられる可能性がある。文頭での用法がみられない *relating to* のように、(30a) ですでに述べたように関係代名詞的用法が増えていることから、*including*, *considering*, *concerning* と比較すればテキスト導入の機能としての役割が強いとはいえないが、全くそのような機能を持っていないと断言することはできないだろう。

以上より、*excluding* は、19 世紀後半以降、いわゆる分詞構文の用法としては典型的には破格とされる、主語不一致の懸垂分詞的な用法がみられるようになっていくが、より顕著にみられる傾向として、関係代名詞的な用法が 19 世紀後半から増加していくという点では、文法化「一方向性」の仮説の反例となり得るかもしれない。

5. 結語

本節では、5.1 節にて本論のまとめを行った上で、5.2 節において問題点、5.3 節において課題と展望を述べる。

5.1 総括

本論では、現在分詞 **excluding** を分析対象として、OED を用いて、その歴史変化に関する考察を進めてきた。結果として、16 世紀頃より動詞派生前置詞用法と連続性を持つ現在分詞の関係代名詞的な用法、主語が省略される動詞派生前置詞との間の境界的な用法は既に存在していたことが判明した。動詞派生前置詞としての用法に関しては、19 世紀頃より動詞派生前置詞 **including** との等位接続という形がみられ、両者は対称的に用いられる場面があったことが予想される。それ以上に顕著な歴史的变化の特徴として、意味上の主語が明示されない、いわゆる懸垂分詞的な用法が 19 世紀後半よりみられるようになり、20 世紀を通して段階的に **minor category** へと範疇が変わっていることを指摘した。また、意味上の主語が関係代名詞と一致することにより、部分的に **excluding** 全体の用法として、動詞から形容詞・副詞を経て前置詞へと変化していくという文法化の「一方向性」の流れに逆行する変化が起きていた可能性がある。ただし、これらの用法と動詞派生前置詞としての用法は共存しており、現代英語に至るまでの流れでは、両者の用法がともにみられるという、まさに秋元 (2002: 190) が述べている「脱範疇化の過程においてみられる、動詞的機能と前置詞的機能が併存する状態」となっている可能性が高い。いずれにせよ、関係代名詞的・懸垂分詞的・動詞派生前置詞的用法の **excluding** が観察されるという点からは、**excluding** は総体として意味が漂白されておらず、段階的に **minor category** へと範疇が変わっているものと位置づけることが妥当であると考えられる。

5.2 問題点

次に、本論に関わる根本的な問題について述べる。第一に、コーパス言語学と理論言語学との接点をいかにして模索するか、という点が挙げられる。本論では、文法化理論との関係について言及することはあったが、理論言語学の知見に基づく概念構造の記述、母語話者の内省に基づく理論言語学の手法に基づく考察を行っていない。コーパス言語学の分野においては、歴史的言語変化を対象に、統計に基づく大規模データを用いた研究が行われてきた背景があるが、全ての言語データが均一に、現実の事象を反映する形でコーパス内に収録されているとは言い難い。本論では大規模データを OED から得ているが、OED は特定の時代、ジャンルに偏っているという側面が否めず、OED 自体をコーパスに相当するデータとして用いようという立場には限界がある (cf. Hoffman 2004)。従って、以上の知見を合一し、幅広い視座と見解を元に広くの言語事例にあたった上で、全部の手法を用いて多角的に言語事例を精査していく必要があるだろう。

第二に、動詞派生前置詞というカテゴリーの「短命さ (shortlivedness)」が問題である。concerning, regarding, touching, relating to, including, excluding といったこれらの用法は、Kortman and König (1992) が指摘するように、前置詞の用法と比べて頻度が低く、さらに、動詞としての現在分詞としての用法も兼ね備えているため、基本的に前置詞として定着する可能性は低いといえる。また、前置詞としての意味として (たとえば **about** と同義の動詞派生前置詞として) 定着し、前置詞 **about** と交替することはおおそ起こりうる

ことがなかろう。従って、動詞派生前置詞は、個々の現象の記述を速やかに行わねば、数十年後には用法自体が消滅してしまう可能性も大いにありうる。そのため、共時的に、現代英語において母語話者の内省などを行うことができる現在の間に、可能な限り多くの事例分析を進め、先行研究としての蓄積を豊かにしていかなければならない。第三に、レジスター、スタイルとの問題を、他の前置詞との関係で考察していくことや、現在分詞、過去分詞、分詞構文、懸垂分詞、受動態、といった他の文法標識と動詞派生前置詞の関係を再考することによって、伝統文法の知見や、品詞カテゴリーそのものを、動詞派生前置詞の文法化という観点から見直し、その通説が妥当であるか、果たしてこれらの言語事実と整合性をもつ形で提唱されているかどうか、精査していく必要がある。

5.3 課題と展望

今後の課題としては、第一に、動詞派生前置詞 *excluding* に関しては、British National Corpus (BNC) を検索して得られる *excluding* の事例 1078 を分析対象として、現代英語を分析対象とした共時的分析を行い、本論にて得られた結果と比較・対称の上で、文法化が現代英語に与える影響を考察していく必要がある。第二に、*excluding* は「除外する」という意味であるが、前置詞 *without*, *but*, *for* や、他の「除外」を表す *saving* との間にはどのような用法の棲み分けがあるのだろうか。そのような点に関しても、OED とともに COHA (Corpus of Historical American English) などを用いて、様々な要因の検討を行って上で複合的に分析を進めていく必要がある。第三に、*including* との間にみられる非対称性の検討である。*including* / *excluding* は、*and* によって等位接続されることがあったが、果たして両者の間に対称性はみられるのであろうか。おそらく、本論の考察に基づく予測では、非対称性がみられるということが考えられる。なぜなら、両者の頻度には大きな隔たりがあり、*including* が遙かに頻度が大きいためである。また、そもそも動詞としての意味が異なる両者が、類似している、または全く同一の歴史的変化の過程を辿っていったとは考えにくい。OED、コーパスを用いて歴史的変化を精査していけば、個々事例ごとに特徴的な独自の要因が発見されるはずであろう。以上の推定から、*including* との関係についても、精査していく必要があるだろう。第四に、トピック導入など、*excluding* の機能的側面の問題が考えられる。*excluding* は、どのような文体において用いられるのだろうか。文頭に現れるというのがいずれの事例においてもみられることから、*including* だけではなく、*excluding*、そして他の事例に関しても、ともすれば動詞派生前置詞全般が、このような機能を持っている可能性が予測できよう。これらについては、個別の事例研究の蓄積と検証が必要であろう。

注

1. Hopper & Traugott (2003) の冒頭における動詞 *go* から *be going to*, *be gonna* への変化には、「文法化」という言語現象に見られる重要かつ本質的である、「再分析」のプロセス、品詞としての特質の変化 (2.3 節にて概観する「脱範疇化」と意味の「漂白

化」、それに伴う「音韻縮約」といった、「文法化」という言語現象にみられる代表的な特徴がみられる。筆者の見解として、この事例は、「文法化」という現象の導入を行い、概観するのに最適である、いわゆる「わかりやすい例」であると思われる。

2. ここでの *major category*, *minor category* という語に対する「大きな文法範疇」「小さな文法範疇」という訳語は日野 (2003) に準じている。ただし、この訳語が適切であるか否かは検討の余地がある。
3. 本論との関連として、Hopper and Traugott (2003: 108) で述べられているこの現象は、動詞派生接続詞の例である。Kortman and König (1992: 673) の指摘通り、*considering* は動詞派生前置詞、動詞派生接続詞のいずれの用法もみられている。ここでは、時制・相・法・人称・数の一致という動詞的機能の損失が、文法化を示す基準となっていることに注目されたい。
4. 「主節の主語と同じ主語を補うことができる」というのは、後の分析において、「分詞」であることを示す1つのパラメーターとして考察に援用されている。これは、「主節の主語と分詞節上の意味上の主語が一致していない」という、「文法的に破格とされ、規範文法家からも避けるべきであると指摘されてきた『懸垂分詞』(早瀬 2007: 77)」との関係にて論じていくこととなる。詳しくは2.4節を参照のこと。
5. 一例として、*be going to* の文法化に関係する文脈では、未来に関する意図が多くなるとされている (Hopper and Traugott 2003: 98)。
6. なお、本論の分析対象とする *excluding* は、Kortman and König (1992) においては動詞派生前置詞として言及されていない。先行研究においては、Quirk et al. (1985: 667, 707) が前置詞と指摘しているのに加え、児馬 (2001: 75) においては、動詞派生前置詞としての *saving* とともに「除外」の意味を表すとして言及されている。
7. *including* との比較・対照に関しては、本論の対象外であるため、今後の課題とする。
8. 安藤 (2005) の定義においては「冠詞」は「形容詞」に含まれるものとされているが、本研究では「形容詞」とは異なる「機能語」に属するものとして分類を行った。ただし、本論4節における *excluding* の考察においては、冠詞 *a / the* が *major category / minor category* のいずれに分類されるのか、という議論が直接的な影響を与えることはない。定冠詞 *the* が限定詞であるという観点が、*excluding* の形容詞性を判定する上の根拠となっているという点では、「冠詞」は形容詞に属するものとは見なさず、異なる品詞カテゴリーに属するものと規定するのが妥当であろう。
9. また、発音上の強勢 (アクセント) の置かれやすさに関しても、(11a) と (11c) の中間的な位置づけにあることを示す1つの証拠となる可能性がある。しかし、アクセントに関わる議論は本論の対象外として、今後の課題としたい。
10. 早瀬 (2009: 91) では、この懸垂分詞構文には、Langacker (1990) の指摘する「主体化 (subjectification)」と、Traugott (2003) の「間主観化 (intersubjectification)」が同時に関わる例である現象と述べられている。これらの概念の検討は本論においては扱わないが、動詞派生前置詞の文法化の検討が、両者の関係を検討していく上での手がかり

りとなるかもしれない。

11. (ii) が本研究ではパラメーターとして不適切であると考えられる理由は、現代英語の母語話者が、数世紀を遡った英語表現を対象に、当時の話者と同様の言語直感をもって判定が可能であるとは考えられない、という点が挙げられる。現代英語における用法であれば可能であろうが、過去の英語用法に関しては、この規定方法が妥当であるか否かは検討の余地があるだろう。
12. なお、**including** についても、ジーニアス英和大辞典、リーダーズ英和辞典、OALD などにおいて「前置詞」という分類がなされている。そして、**excluding** が対義語として挙げられている。
13. (19) や注 12 の辞書を参照すると、**including / excluding** は対義語とされているが、厳密には両者の用法には大きな違いがあると予想される。それは、両者の頻度の問題である。コーパスを用いた動詞派生前置詞の頻度に関わる議論は、Fukaya (1997) を参照。なお、この対比に関する議論は、本論の分析における対象外であるが、OED の件数に関しては、**excluding** が 129 例であるのに対し、**including** は 1863 例が検出されている。単純に、頻度の観点からは **including** が **excluding** を凌駕しており、この点からも動詞派生前置詞としての使用頻度も **including** の方が **excluding** と比較して圧倒的に多いものと考えられる（妥当性に関しては、今後の検討が必要）。**excluding** の頻度が低い理由は、同義の前置詞として、**but, except, without, excepting, saving** などが存在し、これらと用法の棲み分けがなされているからであろうと考えられる。
14. 冠詞 **a, the** は、**a red rose** のように形容詞よりも前の位置に生じる (cf. 安藤 2005: 5; Berk 1999: 58)。
15. 形容詞・副詞は比較変化をもつ (cf. 安藤 2005: 473, 558)。3.2 節 (11b) の議論を参照されたい。
16. 当該の句が典型的な前置詞句 (PP) と等位接続できれば、その句も同じ PP の資格をもつと見なすことができる (丸田・平田 2001: 122)。
17. OED においては、これらは “That excludes or shuts out; exclusive.” という意味の分詞・形容詞と定義されている。

参考文献

- 秋元実治. 2002. 『文法化とイディオム化』 東京: ひつじ書房.
- 安藤貞雄. 2005. 『現代英文法講義』 東京: 開拓社.
- Berk, Lynn M. 1999. *English Syntax: From Word to Discourse*. Oxford: Oxford University Press.
- 江川泰一郎. 1991. 『英文法解説』 東京: 金子書房.
- Emonds, Joseph E. 1976. *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations*. New York: Academic Press.
- Fukaya, Teruhiko. 1997. The Emergence of -ing Prepositions in English: A Corpus-Based

- Study. In Masatomo Ukaji, Toshio Nakao, Masaru Kajita and Shuji Chiba (eds.), *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of his Eightieth Birthday*, 285-300. Tokyo: Taishukan.
- Görlach Manfred. 1991. *Introduction to Early Modern English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 早瀬尚子. 1992. 「分詞構文における Figure / Ground 性についての一考察」『大阪大学大学院英文学談話会』10-22.
- 早瀬尚子. 2007. 「英語懸垂分詞における『主観的』視点」, 河上誓作・谷口一美 (編)『ことばと視点』77-90. 東京: 英宝社.
- 早瀬尚子. 2009. 「懸垂分詞構文を動機づける『内』の視点」, 坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (編)『「内」と「外」の言語学』55-97. 東京: 開拓社.
- 林智昭. 2013. 「英語動詞派生前置詞の文法化に関する認知言語学的考察」京都大学 人間・環境学研究科 修士論文.
- Hoffmann, Sebastian. 2004. Using the OED Quotations Database as a Corpus—a Linguistic Appraisal. *ICAME Journal* 28(4): 17-30.
- Hopper, Paul J. 1991. On Some Principles of Grammaticization. In Elizabeth Traugott Closs and Bernd Heine (eds.), *Approaches to Grammaticalization* 1: 17-35. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Traugott Closs. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press. (日野資成 (訳)『文法化』九州大学出版会, 2003)
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott 2003. *Grammaticalization* (2nd edition). Cambridge: Cambridge University Press.
- 川端朋広. 2001. 「英語における動詞派生接続詞の発達と文法化: provided / providing の接続詞用法」, 秋元実治 (編)『文法化—研究と課題—』97-119. 東京: 英潮社.
- 児馬修. 2001. 「周縁的前置詞 (接続詞) save, saving の文法化」, 秋元実治 (編)『文法化—研究と課題—』73-95. 東京: 英潮社.
- Kortmann, Bernd and Ekkehard König. 1992. Categorical Reanalysis: the Case of Deverbal Prepositions. *Linguistics* 30: 671-697.
- Langacker, Ronald W. 1990. Subjectification. *Cognitive Linguistics* 1: 5-38.
- 丸田忠雄・平田一郎. 2001. 『語彙範疇 (II) 名詞・形容詞・前置詞』東京: 研究社.
- 宮下博幸. 2006. 「文法化研究とは何か」『早稲田言語研究会会報』10: 20-47.
- Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Radden, Günter and René Dirven. 2007. *Cognitive English Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1995. Subjectification in Grammaticalization. In Dieter Stein and Susan Wright (eds.), *Subjectivity and Subjectivisation*, 31-54. Cambridge: Cambridge

University Press.

Traugott, Elizabeth Closs. 2003. From Subjectification to Intersubjectification. In Raymond Hickey (ed.), *Motives for Language Change*, 124-139. Cambridge: Cambridge University Press.

内田充美. 2003. 「Brown, LOB, FROWN, FLOB コーパスの-ing 型前置詞: including の用法を中心に」『女子大文学 英語学英米文学篇』4: 101-122, 大阪女子大学 人文学科.

山梨正明. 1995. 『認知文法論』 東京: ひつじ書房.

辞書・コーパスなど

British National Corpus

Corpus of Historical American English

Longman Language Activator (2nd edition). 2002. Edinburgh: Pearson Education Limited.

Oxford Advanced Learner's Dictionary (7th edition). 2005. Oxford: Oxford University Press.

Oxford Collocations Dictionary for students of English. 2002. Oxford: Oxford University Press.

Oxford English Dictionary (2nd edition, CD-ROM Ver. 4.0). 1989. Oxford University Press.

『英辞郎 第6版 (辞書データ Ver. 128 / 2011年4月8日版)』2011. 東京: アルク.

『ジーニアス英和大辞典』2001-2002. 東京: 大修館.

『新和英大辞典 (第5版)』2003, 2004. 東京: 研究社.

『リーダーズ英和辞典 (第2版)』1999, 2002. 東京: 研究社.

**The historical development of the deverbal preposition *excluding*:
From the viewpoint of grammaticalization**

Tomoaki Hayashi

This paper examines the historical development of the deverbal preposition *excluding*, by analyzing the descriptive data from Oxford English Dictionary (OED). This paper offers a descriptive explanation regarding the categorical changes from the verb *exclude* into the deverbal preposition *excluding* in terms of grammaticalization. With reference to Akimoto (2002), this paper adopts the method of using OED as a source of language data. It provides a detailed observation of the process of grammaticalization from the middle 16th century to the current English: semantic bleaching, the changes between grammatical categories and so on. This paper tries to place deverbal prepositions in relation to the major properties of present participles. This analysis demonstrates as follows: (i) the frequency of the use of relative pronominal *excluding* has gradually developed from the 19th century and it dramatically increased in the 20th century; (ii) deverbal preposition *excluding* does not show the property of the adjective, like comparison and the property of determiners (which does not precede both nouns and any adjectives); (iii) grammaticalized *excluding* does not co-occur with adverbs like *totally* or *deliberately*; (iv) after the 20th century, *excluding* became free of subject-control and obtain the property of prepositions.